

ミャンマーの交通事故で思ったこと

久保公二

長距離路線バスで死傷者が出るような事故が起こると、日本ならすぐに救援が駆けつけるのを期待してしまう。しかし、筆者がミャンマーで遭った事故では、救援がないどころか、現場から自力で家に帰らねばなかった。

在外研究でミャンマーに滞在中、出張先の新首都ネピドーから自宅のあるヤンゴンに戻る夜行バスで、筆者は事故に遭った。道のりは約三五〇キロだが、道路が悪いのと、途中休憩をはさむため、夜の八時に出発して翌朝五時前後の到着となる。車両は日本から輸入された中古の観光バスで、夜行の長距離の移動は、かなりキツイ。

事故は、出発後六時間余り経った午前二時過ぎに起こった。最初、車体が大きく揺れ、寝ぼけ頭には、また路面の悪いところを走っているのかくらいに思われた。つぎに車体が大きく弾み、ヘッドライトが通常ならあり得ない角度で地面を照らしているのが目に入り、その光景を最後に、意識がなくなった。

意識が戻ると、バスの車体は横転しており、右端の座席にいた筆者は、車内の窓枠に寝そべっていた。窓の下は、暗くてよく見えないが、沼のようなものが広がっていた。徐々に意識がはつきりしてくると、今

や天井になっている車体左側の窓の外から、車掌と覚しき人が手を差し伸べて、助け出してくれた。

車外に出てみると、バスが路肩の大木にめり込むかたちで止まっていることがわかった。道路は、ミャンマーの地方道路によくある、路肩の土を掘って盛り上げたところを道路にし、掘った溝は用水路に使うという場所であった。バスは、右側の路肩に滑り落ち、九〇度以上横転しながら大木に食い込み、かろうじて用水路に転落するのを免れていた。バスの前面は大破し、運転席があったあたりは、跡形もなくなっていた。

ボーツとする頭で、困ったことになったなあと思った。怪我のことより、車内の網棚に載せていたノートパソコンが気になっていた。割れた窓から用水路に落ちていたら、大変だ。しかし、筆者はついていた！バスによじ登り、車内に残された荷物を順次引き出してくれていた車掌が、筆者のパソコンも取り出してくれた。荷物の返却は秩序だっており、場違いにも「ミャンマーの人達はいい人だ」と思った。

パソコンも手元に戻り、ほっとすると何か違和感を覚えた。一向に救急車や警察が来ないのである。事故から一時間近く経過しても、周りの村からの野次馬や後続の路

線バスは来るものの、救援部隊と覚しき人達はまったく来なかった。田舎を走る幹線道路なので、助けが来るのに相当時間がかかるのかとも思った。

そのうち、軽傷で済んだ乗客の一部が、現場を立ち去りだすのに気づいた。てっきり警察の現場検証や事故後の補償などを想定しながら待っていた筆者は、面食らった。補償どころか、自腹で後続のバスに価格交渉して乗ってゆく人が多い。そもそも救急体制や警察がまったく当てにならないから、現場で待っていても仕方ないということか。事故に遭ったことが、「ついてなかった」の一言で済まされてしまいうる覚えが驚きだった。結局、筆者も後続のバスの一台にヤンゴンまで送ってもらった。バスのルームライトに照らすと、自分の服が血だらけになっているのがわかった。

後日、事故についてミャンマーの人達に話すと、「よくあること」らしく、「あなたはついていなかった」と評された。また、別の人には、「仏のご加護で、大げげにならず済んだのよ」とも言われ、妙に納得もした。事故以降、以前にも増して熱心にパゴダ（仏塔）にお参りするようになった。

（くぼ こうじ／アジア経済研究所開発研究センター）